

# アイデンティティとカミングアウト

## ～自己・他者・社会との関わりのなかで～

大阪教育大学 森 実

「尊厳」、「自分」、「人間関係」を考える切り口としてのカミングアウトの土台には、自分のことをどうとらえているかというアイデンティティの問題があります。ここでは、アイデンティティという概念をめぐる議論になりそうな事柄と、カミングアウトの過程で重要になる事柄の一端を述べておきます。以下の記述が、学習などの場での議論をうながすことになれば幸いです。

### [1] アイデンティティとはなにか？

アイデンティティとは、「これを欠いては自分ではないと思う属性や特性」をさします\*1。

その1つは、自分のルーツや集団への帰属に関わります。たとえば、「自分は男なのだ」と強く感じている状態を、「わたしのアイデンティティは<男である>ということだ」と述べることができます。男という集団の一員だという自覚です。しかも、アイデンティティという場合、この属性は自分が何者であるかの中核をなすこととなります。本人にとっては、人権思想で語られる尊厳や誇りの根源を構成するといつてよいでしょう。

この意味でのアイデンティティには、肯定的な感じ方と否定的な感じ方の両方があります。「男に生まれてよかった」という肯定的な思いをもつばらもっている場合と、「男に生まれなければよかったのに」という否定的な思いをもつばらもっている場合です。現実の思いは、「男である」という属性について、肯定的な面と否定的な面の両方を抱えながら生きていることが多いでしょう。ときには、そうした引き裂かれるような思いを抱いているからこそ、尊厳や誇りの根源となるのです。

「属性や特性」をなす今1つのものは、趣味や好みなどに関わります。「私は映画を見るのが好きだ」「私は穏やかな性格だ」といった特徴付けです。こちらは「自分らしさ」という言葉で語られることも多いといえます。最近では、企業などが「コーポレートアイデンティティ」といった言葉で、自社がどのような企業であるかを端的に打ち出している場合があります。それも、企業がどのようなことを大切にしようとしているのか、その中核的な事柄を示しています。

人権学習などで重要になるのは、どちらかといえば1つめの意味でのアイデンティティです。そしてこの1つめこそが、現代的な意味でアイデンティティという概念を提唱し始めたエリック・エリクソン\*2という人が重視した面でもあります。そこで以下では、この1つめの意味でのアイデンティティを中心に述べます。

### [2] アイデンティティと人権

アイデンティティというのは、多くの場合、社会から押しつけられるところから始まります。たとえば、「自分は男なのだ」というアイデンティティも、幼い頃から周りの人をモデルとしつつ、「男なんだから泣いてはいけない」「男なんだからはっきりしなさい」といったメッセージを刷り込まれることによって次第に形成されます。好きでそれを選ぶというわけではないのです。「なんだかいやだなあ」と居心地悪く思っている場合もあるでしょうし、「自分は男らしくていい」と自己肯定的に感じている場合もあるでしょう。このようにしてアイデンティティは形成されるものですから、幼い頃、その集団に属しているということや、そのことに関連して抱く思いは多かれ少なかれ自分にとって「当然のもの」です。

けれども、思春期になるころから、次第にそれを自覚的に受け止めるようになります。自分を「男らしくない」

と感じている人のなかには、「男らしくならなければならない」と自分を自覚的に鍛えようとしはじめる人も出てくるでしょう。あるいは、男であることが決定的にイヤになる人も出てきます。スカートをはいたりドレスを着たりしたい人や、自分の身体がオスのつくりであることに耐えられなくなる人がいます。多くの人はとまどいながら、自分の身体的な性別を受け止めあるいは否定し、それにふさわしいあるいはそれとはズレた自分のあり方を模索していきます。

思春期を超えてある時期になれば、自分が男であるということに関連して、自分のスタンスを確立するようになることが多いと言えます。「自分は、スポーツも得意じゃないし、さっさと物事を決断するタイプでもないから、あまり男らしくないと自分で思う。だから男であることを居心地よく感じていない面も多くあるけど、自分は男だということそれ自体まで否定しようとは思わない」というふうに、さまざまなズレを感じながらも、多くの男性は「男である」ということを受け入れるようになるのです。

社会的差別があると、被差別集団に属する人のなかには、青年期になってこのようなアイデンティティの確立に他の人よりも時間と努力を必要とする人たちが出てきます。たとえば、同性愛者の場合、周りが異性を好きになり、異性とつきあい始めるころから、「自分はおかしいのではないか」といった感情を抱くようになってしまいます。それは、「異性愛こそ自然で正常だ」「異性愛以外あり得ない」といったメッセージを社会が発信しているからです。そのような傾向の強い社会では、同性愛者は自己否定の思いを強いられやすくなります。

しかし、自己否定の思いを抱きながら過ごしている人も、その思いを覆すような出会いや学習があれば、次第に自己を肯定するようになっていきます。「同性に恋愛感情を抱くなんて、自分だけだ」と思っていた子どもや若者が、同じように思っている人に、インターネットなどを通して出会います。また、同じ性的指向をもつ人たちのコミュニティに入っていきます。そうして、自分の性的指向が決して自分だけではないこと、多くの同性愛者が(ときには自分のアイデンティティを隠して)さまざまな組織で活躍していること、そして、それらの人たちが互いを認め合って生きていることを知るのである。素敵な人たちに出会い、確かな理論的裏付けを得ることにより、価値観がひっくり返ります。自己否定の度合いが強かった人ほど、いったん価値観が反転すると自己肯定の度合いが強くなりやすいといえるかもしれません。

このように、被差別者にとってのアイデンティティ確立への典型的な流れは、自己否定から出発した人が、次第に自己肯定へと変革していく姿です。アイデンティティというのは、「なにか素敵なアイデンティティを自分で自由に選ぶ」というものではありません。社会から強いられたアイデンティティを逆に自己肯定の根源としてとらえ直すというものなのです。

なお、ここで述べてきた被差別集団のことを英語では多くの場合マイノリティグループ、もしくはたんにマイノリティと呼び、被差別集団ではない人たちのことをマジョリティグループやドミナントグループ、もしくはたんにマジョリティと呼びます。この文章でも、この意味でマイノリティやマジョリティという言葉を用いることがあります。

### [3] カミングアウトとはなにか？

カミングアウト(またはカムアウト)とは、明かしていなかった自分のアイデンティティを他の人に告げることです。これは、もともと「カミングアウト・オブ・ザ・クロゼットComing out of the closet (押し入れの中から出てくること)」という言葉が略した表現です。社会的強制により「押し入れの中にいる」かのように追い込まれ、自分のある面を隠していたけれども、その隠していた面を他者や社会全体に向けてさし出していくという意味です。最初は同性愛者が同性愛者であると明かすことに対して使われました。

同性愛者にとって、自らが同性愛者であると表明することは、かなり大きな危険を伴ってきました。多くの社会において、同性愛者に対する差別が根強く存在してきたからです。とりわけ社会の主流をなす組織に属している同性愛者にとってカミングアウトはためられるものでした。明かしたことによりその組織や社会全体から排除されるかもしれないからです。1970年代まで同性愛が医学的に病気であるとされていたことも、カミングアウトをしにくくした要因の1つだったといえるでしょう。自分で自分のことを「病気」や「異常」と思っていると、自己嫌悪に陥りやすくなります。

このことに関連して、カミングアウトするかどうかを悩まなければならない状況におかれているという点でマイノリティの側に一方的な負担が強いられていることを忘れてはなりません。マジョリティの側は、自分の生まれや生い立ち、本当の名前、性的指向、障がいの有無など、気にせずに話すことができます。話したからと言って、

不利益を被ることがほとんどないからです。ところが、マイノリティにとっては、これら1つひとつについてどうするか判断が求められます。そして、話したとしても話さなかったとしても、リスクが伴うのです。一方はなんの苦もなく話せるのに、他方は不安や苦勞を強いられる。いわば、マジョリティが特権をもってしまっていることとなります。この不公平な状態を変えるには、社会全体の状況を変えていくことが不可欠です。そこへつながる第1歩は、マジョリティの側が自らの特権に気づき、その不当性を変えようと思いはじめることです。

国際的に、カミングアウトが広く取り上げられるようになったのは、HIVに感染した人たちが問題の重要性を社会にアピールし、同じHIV感染者を励まそうとして、自分も感染者であることを明かしたことがきっかけの1つです。はじめのころ、カミングアウトした多くは同性愛者でした。

日本では、血液製剤によりHIVに感染させられた人たちが、薬害エイズとして問題を広く訴えるために、そのことを社会的に発信しました。そのことをさしてカミングアウトという言葉が広く使われるようになり、社会的に大きなインパクトを与えました。その後、被差別部落出身者(以下、部落出身者)や在日韓国・朝鮮人(以下、在日コリアン)などが自分の立場を明かすことをカミングアウトとも呼ぶようになったといえます。さらにその後次第に、被差別者だけではなく、他者に隠している出生や身体的特徴、社会的立場などを明かすことをカミングアウトと形容する場合も出てきました。

他者に自分の意見や感情、生き立ちや暮らしなど、見ているだけではわからない事柄を伝えることを自己開示といいます。ですからカミングアウトも自己開示の一種です。異なるのは、カミングアウトの場合には、開示する内容がなんらかの意味で不利益につながりかねない事柄だけに限定して用いられるということです。

## [4] 立場宣言とカミングアウト

日本では、部落出身者や在日コリアンであることなどを自己開示することを、立場宣言(出身者宣言・本名宣言)などと呼んできました。子どもがクラスで立場宣言をする。職場で同僚たちに立場宣言をする。どちらかといえば集団に向けて自分の立場を告げることが立場宣言とされてきましたが、恋人に自らの立場を告げるという場合も立場宣言という言葉で語られることがありました。立場宣言にはさまざまな場面が含まれていたのです。

また、立場宣言するときの内容も、多くの場合、自分が被差別の立場にあることだけを語るのではなく、そのことによりこれまでどんな思いを抱いて生きてきたか、自分の家族がどんな生き立ちや生活を送ってきたか、なぜ自分が今この立場宣言をしているのか、聞いている相手になにを期待しているのか、といったこともあわせて述べるのが含意されていました。立場宣言に関連して、多くのことが論じられ、整理されてきました\*3。この財産をさらに整理し発展させる作業も求められています。

それに対してアメリカでは、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック系アメリカ人など、社会のおもなマイノリティグループが、民族的なマイノリティであったため、わざわざ自己開示しなくても、名前を聞いたり本人と会ったりすればたいい分かる存在だったのです。それで、民族的マイノリティについては、あまり自己開示が問題になってこなかった面があります\*4。結果として、同性愛者など性的マイノリティ\*5、さらにHIV感染者などの問題がクローズアップされるようになって初めて、カミングアウトという言葉が使われるようになったといえます。アメリカにおいては、被差別者の自己開示をめぐる議論も、そこから活発化したといえるでしょう。

同性愛者など性的マイノリティの場合、部落出身者や在日コリアンなどと似た状況にあります。1つ大きく異なる点があります。それは、家族に対するカミングアウトという問題です。部落出身者や在日コリアンの場合、たいい家族も同じ立場であり、自分だけが異なることはほとんどありません。しかし、性的マイノリティだと、逆に多くの場合は家族のなかでも孤立しています。家族に対してどうカミングアウトするのかという点も大きな課題となります。カミングアウトした後での家族との関係についても、葛藤や悩みを抱えている性的なマイノリティの人は多くいます。

## [5] アウティングの問題点とプライバシー権

カミングアウトが自分で自分に関する事柄を開示することをさすのに対して、他者に関することを本人の承諾

を得ずに曝<sup>さら</sup>すことをアウトティングとといいます。

今日的なプライバシー権は、「自分に関する情報を自分でコントロールする権利」とされています。アウトティングでは、本人の承諾を得ずに曝すのですから、これはプライバシー権を侵害するものに他なりません。たとえば、誰かのことを「部落出身である」と報告すれば、それはアウトティングであり、明らかなプライバシーの侵害です。しかも、「部落出身」という概念そのものが曖昧<sup>あいまい</sup>ななかで、誰かを部落出身とアウトティングすることは、明確な根拠もなく差別の標的とすることを意味しています。そのようなアウトティングは、結婚などの場面で、何度も悲劇をもたらしてきました。

かつて、プライバシー権は「私生活に踏み込まれない権利」を意味していました。しかし、情報化が進展するもて、どこまでどうすることが私生活に踏み込むことなのか、定かでなくなりました。たとえば、インターネット上であれば、名前を明かすだけでも不利益が発生しかねません。逆に、さまざまな人とつながろうとすれば、ある程度リスクを覚悟しながら自分を開示していくという戦略をとることもありえます。では、そのような人たちの言っていることを他の人がどんどん広げてもいいのでしょうか。一律のモノサシをあてがって、すべての人の「私生活」を同じ基準で管理することは不可能なのです。プライバシー権も、もっと積極的な意味合いの概念に組み直さなければ、情報化社会に対応できないということになりました。

そこで、OECDが1980年(昭和55年)にプライバシー 8原則を打ち立てました。その基本原則が「自分に関する情報を自分でコントロールする権利」という考え方です。この原則に立てば、他者に関するなんらかの情報を伝えるまえに、本人の了解を得ておく必要があるということになります。たとえば、マスメディアなどの企業や、多数の会員など関係者のいる団体は、誰かについて情報を持っているならば、そのことを本人に伝えなければならないのです。そして、本人から「わたしに関する情報を持たないでほしい」といわれれば、その情報を破棄しなければなりません。「持っていてかまわない」といわれれば、自分たちの持っている情報が正確で最新であるかを本人に確かめてもらい、公開してかまわない範囲を決めてもらうなど、更新をしてもらう必要があります。日本における個人情報保護法も、このような考え方をベースにしています。

この変化により、個々人に求められることが大きくなりました。以前のプライバシー観に立つなら、個人はとりあえずなにもする必要がありません。マスコミなどが私生活に踏み込むかどうかだけが問題だったのです。それに対して現代的なプライバシー観に立てば、個々人がどのような場面で自分のどのような面<sup>つちか</sup>をどれくらい出すのかを判断しなければ権利を行使できないことになります。その判断力をどこかで培わなければならないことになったのです。そんな力が自然に身につくとは考えられません。幼い頃から自己開示の経験を重ね、どのようなときにどのような内容を自己開示することが望ましいのかについて、体験的に学んでいく必要があります。もちろんそのことは、他者のプライバシー権を守るためにどうすればよいかということも学ぶことにも通じます。他者に1つひとつ判断を求めながら、その人に関する情報をどこまで出してよいのかを確認しなければならないのです。

アウトティングは、このようなプロセスを踏まずに、かつてに他者に関する情報を他の人に伝えることを意味しています。個人情報保護法では、500人以上の情報を持っている組織に対してその情報の扱いを定めているのですが、「自分に関する情報は自分でコントロールする」という原理は個人が持っている他の個人に関する情報についても適用されるべきです。

## [6] カミングアウトの過程で大切にされるべきこと

カミングアウトで最も大切にされるべきことは、周りに強いられて行う筋合いのものではないということです。それぞれの場面や相手との関係がどのようなもので、その関係をどのようにしたいのか、そのような点に関する本人の判断を土台に据えて進められなければなりません。本人が言う必要がないと感じている場面でカミングアウトする必要はまったくないのです。周りの人たちの働きかけも大きな意味をもちますが、それも、カミングアウトする方がよいかどうかについて本人が判断する手がかりになるとか、アドバイスになるなどの域を出ません。

さらに言えば、マイノリティのZグループに属するAさんがなんらかの会で「Aさん、Zグループを代表して意見ををお願いします」などと求められる場合があります。しかし、どのような集団に属している人であれ、その集団を代表して発言できるわけではありません。このような事態が発生するのは、そのZグループに属する人が、その会合ではAさん以外にいないと思われる場合でしょう。あるいは、そのグループでは、同じ集団

に属している人であっても考え方や経験は同じではないのだという発想が欠落している場合です。そもそも、本人の意向を抜きに、いきなり尋ねられても困ります。アウトティングにもつながります。

このように考えれば、カミングアウトにかかわる過程で一番問われているのは、周りにいる人たちのあり方だといえます。心のドアのノブは内側にしかついていないのです。外から誰かがこじ開けることなんてできません。だから、周りができるのは、当事者本人からみて「この人になら語りたい。言わずにいられない」と思えるような人物になることだけ。そう語る人がいます。

本人の判断を土台に据えたものであっても、カミングアウトの過程では、多くの要素が絡み合い、さまざまな問題が発生しやすいといわざるをえません。その一方で、もしもカミングアウトが成功すれば、カミングアウトした人にとっても、それを受けた人にとっても人生が大きく広がる場合があります。ですから、どのようなときに問題が発生し、どのようなときに人生が広がるのか、違いが発生する要因を整理することは重要だといわなければなりません。

カミングアウトと一言で言っても、その目的や場面は大きく異なります。カミングアウトする人の目的に即して考えるだけで、少なくとも次の5種類ぐらいには分かります。そして、それぞれの目的によって、聞いた側に期待されることもさまざまに違ってくる可能性があります。言い換えれば、以下にあげる目的の達成が見込めないならば、カミングアウトする必要もありません。そして、カミングアウトしない(あるいはしなかった)ことについて、周りがなにかを言えるわけでもないといえるでしょう。

### ①助けを求めるためのカミングアウト(精神的・物的援助を求める場合)

先に述べたようにカミングアウトは、不利益を招きかねない自分の属性を他者に明かすことをさしています。その属性をもっていることによって、本人はなんらかの困難を強いられている場合も多いものです。ときには、なんらかの財政的支援も必要としているかもしれません。困難について、誰かに聴いてもらい相談に乗ってもらえるなら、それだけでも支えになるという場合もあります。

このような場合のカミングアウトは、本人がどの程度、どのように行き詰まりを感じているかによって、するかどうか違ってきます。また、明かそうとする相手がどの程度自分の状況を受け止めてくれそうな人物なのか、判断の基準として重要になります。

聴き手の側からすれば、この場合には、相手がなにを求めているのかをていねいに聴き取らなければならないでしょう。もしも支えを必要としているなら、それがどのような支えであるのか。もしも問題解決を必要としているなら、どのような問題についてどのような解決をイメージしているのか。対話を通して整理していきたいものです。

残念なやりとりの1つは、「しんどさ比べ」や「苦労自慢」が始まることです。「しんどさ比べ」や「苦労自慢」とは、誰かがカミングアウトをしたときに、「あなたよりもわたしの方が大変な状況を経験している」といった返事を返すことです。後に続けて「そんなことで人を頼ってはいけない」といったセリフが加わることもあります。「しんどさ比べ」は、「助けを求めるためのカミングアウト」の場合だけではなく、以下に述べるようなカミングアウトの場合にも発生します。聴き手が「しんどさ比べ」の発想になってしまう原因は、差別を支える社会的仕組みやカミングアウトの目的をその聴き手がはき違えている、その聴き手自身が自分の問題を整理できておらず肯定的にとらえられていない、なんらかの事情でじっくりと聴くだけの精神的余裕がない、などです。「しんどさ比べ」をしはじめた人自身がなんらかの助けを必要としている場合も少なくありません。

### ②喜びを共有したいカミングアウト

さまざまな出会いや学習を通して、社会の中にいる自分自身の立場性が見えてきてスッキリすることがあります。なんだかモヤモヤしていた正体が、人権学習などを通して整理できたという場合などです。そういうことが発生するのはたいてい、単発の学習ではなく、継続的に同じ集団で活動し、学んでいる場合です。モデルとなる人が周りにいたり、周りの人からの支えや鍛えあいがあってスッキリしてきたのですから、こういう場合には、自分の感じている喜びを周りの人に語りたくなるものです。

このようなときに聴き手となるのはいっしょに活動してきた人たちですから、語り手の思いもわかりやすい場合が多いでしょう。「よかったね」「そんなことが聴けて、わたしも嬉しい」という言葉を思わず返したくなるのではないのでしょうか。

中学校や高校などで、生徒が自分のことをクラス全員に向けてカミングアウトすることがあります。その多くは、このように「喜びを共有したい」からこそするカミングアウトです。年度当初に行われるよりも、年度の途中

でなにかをクラスで達成した後などに思わず出てくることが多いといえます。知らない人に語るのではなく、ともになにかを達成した仲間意識があって語るのです。

このような場合にも、温度差はありえます。語る本人にとってはそのクラスの全員が親友のように思えていても、聞いている側にとっては、「なぜあいつがここでそんなことを言うのかわからない」といった感想を抱く場合です。

### ③より深い関係を求めてのカミングアウト

相手とのつきあいを今以上に深めるうえで、自分に関するこの情報を伝えることは不可欠だという場合があります。たとえば、結婚を意識する関係になっていて、その情報も相手に告げた上で2人の将来をいっしょに考えたいと思う場合です。自分がなんらかの被差別の立場にあり、このことが分かったなら相手はともかく家族や親戚からの反対もありうると推測し、あらかじめ伝えておかなければかえって問題が広がりかねないと判断する、あるいは、伝える相手自身がその内容を聞けば心変わりするおそれもあるという場合です。

この場合、カミングアウトしたことによって相手が去っていくかもしれないと思いながらするのです。しかし、一方で、カミングアウトしないままではかえって問題を複雑にしてしまうおそれがあるとも感じています。このような状況にある人は、あらかじめなんらかの意味の確かめ行為をしていることがあるものです。その問題について一般論として持ち出し、それに対して相手がどのように反応するかを事前に見ておく。自分と同じアイデンティティをもつ他の当事者と出会う機会をもち、そのときの相手の感想を聞いておく。そのようにして、自分のアイデンティティについて相手がどのような考え方をする人なのかを確かめていくのです。確かめ行為は、意図して行うこともあるでしょうし、偶然そのようになることもあるものです。

このようなカミングアウトでは、カミングアウトする側がなにを期待しているのか、その場で分かることが多いといえます。期待している内容をはっきりと告げる場合もあれば、言葉にはしない場合もあるでしょうが、言葉にしなかったとしても、文脈からそれが十分に読み取れるはずで

その後の関係でも、自分がカミングアウトした立場にあることをふまえて、そのことを互いに自覚しつつ関係を深めていきたいと考えているでしょう。だから、せっかくカミングアウトを経験したなら、そのあとの関係を通してどのように絆を深めることにつなげられたかが問われるのです。語った人と重なるような体験はないのでしょうか。あるいは語られた内容から、自分が知らず知らずのうちに加害者的な立場に立っていたことが見えてきたということはないでしょうか。その場ですぐに、でなくてもかまいません。重なること、つながることを返したいところです。

この場合、カミングアウトする側にとって期待はずれの返答は「そんなことは関係ない」「いちいち小さなことを気にするな」「これまでとなにも変わらない」といった言葉です。カミングアウトする側は、そうするまでにさまざまに悩んでいるものです。「いちいち気にするな」という発言自体が、悩んできたことを否定することになってしまう場合があります。そんな返事を返された上に、そのあとの関係でまったくその属性にふれないようなやりとりが続くなら、カミングアウトした側は失望するかもしれません。

### ④嘘をつきたくないというカミングアウト

自分の直面している問題状況が少なくともある程度は解決している場合、他の人とのつきあいの中で自分を明かしたくなることがあります。たとえば、親友になった人に対して、「自分がこのことを語らないでいるのは嘘をついているのと同じだ」と自分で感じてしまうような場合です。あるいは、「この人との間では、言わずに隠しておく方が不自然だ」と思えるような場合です。明かすことによってなにが起こるかについて不安がないわけではありません。しかし、それ以上に「言っておきたい」という気持ちが強くなっているのです。

このようなカミングアウトは、前に述べた「助けを求めるためのカミングアウト」とは異なります。本人の意識としては、特に助けなどは必要としていないからです。この場合、カミングアウトする本人にとってイヤなのは、聞いた相手から「腫れ物に触る」ように対応されることでしょう。たとえば、自分が「母子家庭である」ということを相手に告げたときから、相手が「無神経に母親のことを話して悪かった」と詫びはじめ、その後その相手は母親についてまったく話題にしなくなったという経験をした人がいます。

聴く側としても、もしもカミングアウトした側のスタンスが「嘘をつきたくない」ということであるなら、それに対する返事は「ありがとう。大切なことを語ってくれて」というだけでよいかもしれません。上記の例にあるように、聞いたことを勝手に「相手の弱み」と解釈して、それにふれないようなことをすれば、カミングアウトした側の思いを逆に傷つけてしまいかねません。

結婚して10年以上たち、子どもさんが2人いるあるご夫妻の話です。夫さんは部落出身で、妻さんは部落出身ではありません。妻さんは、夫さんが部落出身だとは知りませんでした。夫さんは結婚してから部落問題についていろいろと考え、学び、そのことを妻さんに語りたいと思うようになりました。妻さんからどんな返事が返ってくるかどきどきしながら部落出身であることをカミングアウトしました。「そんなこと関係ない」というのが返事でした。夫さんはほっとしたそうです。それまでと変わらない生活を続けられること、それを夫さんは望んでいたということでしょう。その後、妻さんは、部落問題についての学習や活動を深めました。

このように、もしもカミングアウトした側が、まったくこれまで通りの関係でよいと考えているなら、「そんなこと関係ない」という返事は、特に問題にならないかもしれません。聞いてほっとできる言葉になる可能性さえあるのです。このように、同じ返事であっても、カミングアウトした人の状態によって、どのように響くかは異なるものです。そこから関係をどう深めていくかは、聞いた側に大きくゆだねられています。

### ⑤自分を事例として問題を訴えるためのカミングアウト

最後に、自分を事例として社会的な問題を訴えるためにカミングアウトする場合があります。被差別者である人たちは、講演会や聞き取り学習の場などで、自分の体験や生い立ちを多くの人たちの前で語ります。この項目でイメージしている典型は、そのような場面でのカミングアウトです。語り手は、自分自身の体験の独自性と一般性をふまえながら、問題を語ろうとします。たんに理屈だけを聞くのではなく、1人の人の深いところでの思いをくぐらせながらの話を聞けるので、問題が具体的で心に響きやすくなります。

見知らぬ多くの人たちの前で語る場合、カミングアウトする人自身は、たいてい自分の問題をすでにかなり整理できていたり、心理的に解決できていたりするものです。だから、聞いている人たち全員が自分のカミングアウトを的確に受け止めてくれるとは想定していません。実際、せっかく話しても、期待するような感想が得られないこともしばしばあります。逆に言えば、自分の問題をまだ整理できていない状態なら、こういう形のカミングアウトはさけた方が賢明だということになります。

自分を曝しリスクを引き受けてでもメッセージを発信するのは、聴き手に考えてほしいからです。聴き手には、ぜひ、自分に引きつけて、自分と重ね合わせながら考えてほしいのです。聴き手のなかには、語り手と同じ面で被差別の立場にある人もいるでしょう。そうでなくても、話し手の体験が自分の体験に重なるという人もいるでしょう。話の内容を聞いて、自分の何気ない行為が人を追い込んでいたかもしれないことに気づいたという人もいるでしょう。自分の行っている活動が話し手の思いに通じると感じて嬉しかったという人もいるかもしれません。そのような返事こそが期待されているといえます。

「頑張ってください」「偉いと思いました」という返事は、多くの場合、自分を語った人を消耗させるだけです。「そのような返事をもらうぐらいなら、いっそ『しんどさ比べ』でもいいから反発される方がましだ。次の会話で深めていく可能性があるから」。そんな風に言う人もいます。なにを書いてよいか分からず、「頑張ってください」といった内容に止まるなら、まだ救いはあるかもしれません。問題なのは、「頑張ってください」や「話してくれたあなたは偉いと思います」という感想を話し手が期待していると錯覚している参加者がいるということです。そのような誤解は、話し手にとってきわめて残念なことだと推測できます。

カミングアウトを考えると、重要になる要素は他にもさまざまにあります。たとえば、どのような文脈で語るのかということです。相手とのこれまでの関係はどのようなもので、どれほどの期間、続いてきたのか。その直前になにがあって、なにをきっかけとして語るのか。あるいは、相手が何人で、その人たちはどんな意識を持っているのか。さまざまな要素が絡んで、カミングアウトの場が成り立っています。

## [7] カミングアウトを左右する要因

このように見てくると、カミングアウトを左右するいくつかの要因があることが浮かび上がります。特に大きな要因は次の3つです。

第1は、世の中がその人のアイデンティティに関わる属性についてどのような価値判断をしているかという問題です。世の中がそのアイデンティティを否定的に見ていないなら、自己開示することにもさほどためらいはないことでしょう。でも、そんなときには、それについてカミングアウトという言葉を使うこと自体がそもそも適当では

ないかもしれません。もしも、世の中がそのアイデンティティを否定的にさげすんで見ているなら、カミングアウトはなんらかの意味でしにくくなりやすいと言わなければなりません。でも、そのような要素について自己開示することこそが、カミングアウトなのです。

第2には、世の中がどう見ていようと、本人が自分のそのアイデンティティをどう見ているのかという問題があります。世の中が否定的に見ている属性について、自分自身でも否定的に感じている場合には、カミングアウトには至らないことが多いでしょう。カミングアウトに至る場合にも、その目的は、「支えてほしい」「悩みに答えてほしい」といった性格が強くなりやすいでしょう。それに対して自分自身がその属性を肯定的にとらえ始めている場合には、本人の思いとしては、「語りたくなる」、または「語ってもかまわない」という思いになることが多いものと推測できます。

ただし、そういう思いには、さまざまな場合があることも重要でしょう。たとえば、部落出身の若い人たちのなかには、恋愛関係であれ友人関係であれ、つきあうときには初めから自分が部落出身だと言っておくという人がいます。そのことへの対応によって、相手がどういう人か、たちどころに分かるというのです。逆に、ほとんど言わないという人もいます。その人たちのなかには、「部落出身かどうかによってわたしの個性や値打ちが変わるわけではないから」と言う人もいます。両者とも、部落出身であるということが今の社会で不利益を被りやすい立場であることは認識しており、差別は見過ごさないという姿勢ももっています。しかし、具体的にどう行動するかということについては、一見すると大きく異なる向き合い方があるのです。

第3に、世の中の見方や自分自身の見方とは独自の問題として、今周りにいる人たちの価値観やその人たちとの関係があります。さきの項目で述べたことから分かります。周りの人たちの本人との関係は、カミングアウトにとって決定的な意味をもつことが多いと言えます。カミングアウトする人が「支えてほしい」と思っている場合であれ、「問題をしっかりとらえて自分に引きつけて考えてほしい」と考えている場合であれ、聴き手がどんな人であるかは決定的な意味を持ちます。

世の中がそのアイデンティティを否定的にとらえていて、本人もまだ否定的にとらえているという場合であっても、周りの人たちが、そのことを受け止められる状態であれば、本人は語る可能性も高いのです。

また、世の中がそのアイデンティティを否定的にとらえていても、本人が肯定的にとらえており、周りも肯定的にとらえていれば、いちいちカミングアウトする必要もない場合があります。自分自身が自分のアイデンティティのとらえ方を否定から肯定へと反転させたばかりのころは、他の人の生い立ちや思いについても聞きたくなるものです。「そういう反転がない人は信じられない」と思っている時期さえあります。しかし、他の人も多くは同様の反転を経験していることが分かってくれば、いちいちカミングアウトしたり、相手にカミングアウトを求めたりはしなくなることも多いと言えます。

## [8] 「カミングアウトはビカミングアウトだ」

「カミングアウトはビカミングアウトだ」といった人がいます。つまり、「外に出てくる Coming out」というだけではなく、「変わる Become」という意味合いを含んでいるというのです。言い換えると、「自己を明かすことは、自分自身が、そして相手との関係が変わっていくきっかけとなるのだ」というほどの意味合いです。カミングアウトは以上のようなものですから、それをしたことによって、本人と相手の関係が大きく変わっていく場合があります。すでにふれたように、むしろ関係が深まることを期待してカミングアウトしているという場合が少なくないのです。なお、ビカミングアウトというのは和製英語で、英語にこのような言い方はないようです。

ある学生は、母子家庭としてカミングアウトすることをためらいがちになっていました。中学校のころから、「自分の家族に父親がおらず、母子家庭で育ってきたのだ」と友だちに言うたびに、なんだかまわりから「かわいそうな子」と見られているような気がしていたからです。しかも、露骨にそう言われるわけでもありません。そう直接に言われれば逆に言い返しやすいのかもしれませんが、なにも返されずに、なんとなく腫れ物に触るような対応をされているように感じていたのです。そのため、しだいにカミングアウトするのがイヤになってきていました。

その人が大学に入って、友人とのやりとりのなかで、母親のことが話題になりました。その友人から、「あんたとはどうなん?」と訊かれたので、おもわず「うん、うちは母親おれへんねん」と返しました。すると、その友人は、「ふうん。なんでなん? だって、大事な友だちのことやから、ちゃんと知っておきたいもんね」と返してきました。その言い方が率直で、誠実な関心を寄せてくれていると感じられたので、その人はすごく嬉しくなった

そうです。母親の話で盛り上がり、2人の絆は、このことをきっかけにいっそう強まりました。

ある同性愛者の男子学生は、同級生の女子たちと恋愛についての話になるたびに、自分の「彼」を「彼女」と言い換えて話していました。でも、そんなぎこちなさは、その女子たちにも伝わっていたようで、「なにかへんやなあ」という思いを抱きながらクラスの活動などをいっしょにしていたのですが、同性愛の男子学生は、しだいに「本当のことを言いたい」と思うようになりました。言ったからといって、その同級生の女子たちとの関係がまぶくなるようには思えなかったのです。言わずにいられなくなったある日、彼は自分が同性愛者であることを告げました。すると女子たちは、「なんや。そうやったんか。それでよーくわかったわ」と、それから恋愛についての話をはじめ、いろいろなことを前以上に率直に話しあえるようになりました。

受け止める側の姿勢や誠実さによって、カミングアウトした人の暮らしやすさはまったく違ってきます。両者の関係も、豊かで深まりを見せるようになります。カミングアウトとは、そういう新しい関係が生まれる可能性を秘めています。両者の努力と誠実さによって、そうなるかどうかは左右されるのです。ぜひカミングアウトする側としても、カミングアウトを受け止める側としても、もしもそのような場面に出会うなら、プラスになるように活かしてほしいものです。

社会のさまざまなところでそのようなカミングアウトの波紋が広がっていくことにより、社会が変わっていく可能性も広がっていきます。私たち1人ひとりのカミングアウトとは、社会に投げかけられた小石のようなものかもしれませんが、しかし、1つひとつの小石は、湖に波紋を広げるとともに、湖の底におちるまでに魚のそばを通り、水草に絡まりながら底へと近づき、水底にたどり着いたときには細かい粒子をふわりと立ち上がらせて自分の居場所を定めます。カミングアウトは、いわば社会という湖に投げかけられた小石です。自分の周りでカミングアウトがあったときや、自分自身がカミングアウトしたときには、それが社会全体に広げる波紋を期待するとともに、しるべき深みにまでつながるものとして受け止めあいたいものです。その経験の蓄積が社会を変えるところへとつながるはずで

- 
- ※1 アイデンティティという概念については、鑓幹八郎著『アイデンティティの心理』（講談社新書、1990年）、E・H・エリクソン著、西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』（誠信書房、2011年）などを参照。
  - ※2 ロバート・コールズ著『エリク・エリクソンの研究』（ペリカン社、1980年）など参照。
  - ※3 中側福督著『親の思い子の思い』（明治図書、1982年）、森 実「人権意識の形成と教育の課題」（中野陸夫監修、中尾健次・森 実編『同和教育の理論』（有信堂、1987年、78-119頁）などを参照。
  - ※4 アメリカにおいても、民族と関連してカミングアウトの問題はあった。たとえば、アメリカでは少しでも黒人が先祖にいれば黒人と見なされた。そのため、白人と思いきこんでいた人のきょうだいとして肌の色の黒い人が訪れたために、その人の人種帰属が明らかになった例などがある。また、歌手や俳優のなかには、みずからの民族性を隠すために、芸名として本来の民族性を連想させない名前をつけた人が少なからずいる。
  - ※5 さまざまな性的マイノリティの置かれた状況については、セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著『セクシュアルマイノリティ』（明石書店、2003年）などを参照。